

The Marumouchi Tribune

Page 01

丸の内トリビューン

サカキラボがお届けする、現代社会の潮流を読み解くための月刊紙。さらなる情報はサカキラボホームページで。⇒

www.sakakilab.net/

パワースポット巡礼

Very Special Place

17年にわたり、ライフワークとして世界のパワースポットを撮影してきたフォトグラファーの本間日呂志さん。その集大成がこのたび、『特別な場所』（武田ランダムハウスジャパン）という本になりました。そこでMGSでは2011年最初の展示として、本間さんのパワースポット写真展を開催します。本間さんに「特別な場所」への思いを聞きました。

自然と一体になった特別な場所

最初はピラミッドの不思議な存在にひかれました。メキシコやエジプトを訪れて撮影していたのですが、気持ちが変わっていったのです。ピラミッドなどとは違う、自然と一体になっている特別な場所へと興味がわいてきました。自然を利用して人が手を加えたものや自然と人が一体になったものなど、「自然」を求めるようになりました。

パワースポットとの出会い

撮影を始めたころはまだパワースポットという言葉もなかったのですが、さまざまな特別な場所について、その場所の歴史、自然の歴史、人の歴史を勉強しながら、いままでやってきました。積み重ねていくうちに、出会った人や風景が、その次に訪れるべき場所へと導いてくれることがよくありました。

たとえばイギリスのグラストンベリーでは、B&Bで一緒になった若者からマルタ島をすすめられました。アメリカのセドナでは、現地の人に「また戻ってくるよ」といわれ、本当にもう一回行ったことがあります。何かに導かれるように、さまざまな場所を訪れましたが、特別な場所についての興味が、真剣に探しているからこそ導かれるのだと思います。



01 2009.グラストンベリー、イギリス/トール(Tor)。宿泊したB&Bの庭にはユニコーンが現れると教えてくれた。

出会ったときの状況を撮影する

場所との出会いを大切にしている、出会ったときの状況そのままを撮影しています。時間的制約があるので、光や天候の変化を待つことができないというのも理由のひとつですが、そのときの出会いを大切に、ありのままを撮影しています。

自然の姿というものに興味をひかれ、撮影を続けていますが、「きれいな自然の姿を撮りたい」という思いは変わっていません。ジャーナリズム的にアプローチする自然、たとえば災害や環境破壊などの写真も重要ですが、

私は美しい自然を紹介していくことで、多くの人々が「実際に見てみたい」「守らなければいけない」と思ってくれればいいです。自然の中の花畑など、自然にそうになっているというのは何かがある、と思うのです。これこそ本当のパワースポットだと思います。

パワースポット巡りのアドバイス

旅先どこにいても、その場所、そこに住む人々に対して敬意を払えば、きっと快く迎えてくれます。温泉というのもパワースポットです。その土地の自然が生んだ温泉につかり、その土地のものを食べるとパワーをもらえます。その土地でとれた新鮮なものにはエネルギーがみなぎっています。そのエネルギーを生かしたシンプルな料理を味わうといいですね。

最近訪れたパワースポット

伊勢、出雲、熊野に行きました。それぞれの場所で感じる空気は違いましたね。熊野は厳しい自然があり、空気の重さを感じました。悪い意味ではなく重厚ということです。伊勢は人が神様のためにしっかりとコントロールしている場所で、空気は軽やかでした。出雲がその中間のほどよい感じといえるでしょうか。

02 1996.ウエスタンデザート、エジプト/カイロに向かう夕暮れ時、UFOと遭遇した。 03 1998.コナコースト、ハワイ島/乾いた溶岩大地に咲き誇るブーゲンビリア。 04 2007.山梨/山中湖から望む、日の出を受ける富士山。 05 2006.マウントオルガ、オーストラリア/岩の間を進むと柔らかなエネルギーに包まれる。 06 2008.セドナ、アメリカ/ホーリークロスチャペルと星雲。無数の星が漆黒の天空を覆う。





07 2008 セドナ、アメリカ/レッドロックに立つホーリークロスチャペル。 08 2010 ゴゾ島、マルタ/アズールウインドー。マルタは地中海の真ん中に位置し巨石文明、そして女神伝説が残る。 09 2008 セドナ、アメリカ/小さな町の名もない岩山。 10 2002 マウナケア山頂、ハワイ島/4月はまだ残雪がある。 11 2009 奈良 / 喜光寺の蓮。 12 2009 東京 / 高尾山より年に1度、冬至の頃にみられるダイヤモンド富士。鳥が程よく取まってくれた。 13 2009 奈良 / 唐招提寺の蓮。花の命は2日といわれている。それを思うと美しくもほかかない。 14 2009 東京 / 皇居の桜。のびのびと優雅に咲いている。 15 2009 グラストンベリー、イギリス/2000年も枯れない泉のあるチュリスガーデン近くのリンゴの木。 16 2006 エアースロック、オーストラリア/地平線に太陽がわずかに残った時間。対角線上に月が昇り始めている。 17 2010 東京 / 高尾山山頂より。2010年1月1日の満月。月食と重なった貴重なタイミング。

Art in Paris

フランスに学ぶアートな暮らし

アートは人生を豊かにしてくれる

「芸術の都」と呼ばれ、世界中から年間1,500万人ともいわれるビジターを集めるパリ。街を漂うどこか特別な空気と雰囲気、ただ歩いているだけでも心がワクワクしてきて、しばらく暮らした今でもそれは変わることがありません。そんな街で、人々はどうな風にアートを楽しんでいるのか気になりますか? ルーブルやオルセーなど世界の名作がならぶ美術館めぐりも楽しいけれど、フランス人の芸術への思い入れとその奥行きは深さは、美術館の数だけでは語りきれません。この国には、アートをもっと身近に感じる場所や時間がたくさん。そこには、フランスならではの街の楽しみ方、人生を豊かに過ごすノウハウが垣間見えます。ガイドブックには書いていない、ちょっと素敵なフランス流アートな時間をご紹介します。

ギャラリー、芸術の最前線

まず最初に紹介するのは、山手線の内側くらいのパリ市内に星の数ほどもありそうな「ギャラリー」。そこは

アートの今を感じることができる「芸術の都」の発信拠点です。特にギャラリーが多く集まっているのは、国立芸術学校を中心にしたサンジェルマン地区、そして国立近代美術館が入ったポンピドゥーセンターからマレ地区にかけてのエリア。そのほか作家たちが多く住むモンマルトルやモンパルナス、最近では東の20区界限などもアートの宝として注目されています。

近代絵画、現代アート、写真、彫刻、骨董など、それぞれのギャラリーには専門があり、自分の好みで立ち寄りみます。そうすると、知っているはずの街も違って見えてきます。

「アートを買うつもりもないのにギャ



写真・文 / 杉浦岳史 東京で広告ライター、ディレクターとして活動のち2009年に渡仏。現在パリの高等学院IESAに在籍し、美術史、アートマネジメントやアートマーケットを学びつつ、執筆活動をつづける。http://ameblo.jp/sucweb/ パリの展覧会情報はアート情報誌「l'Officiel」のウェブサイトをご参考に。 http://www.officiel-galleries-musees.com/

ラリーに入るのはちょっと…」と構える必要はありません。たいていのギャラリーでは通りがかりで入っても何の問題もなし。この国では、真剣なアート愛好者でなくとも好きなギャラリーに気軽に出かけてギャラリストと話をし、そのまま帰ることもあるし、もし自分が買える値段で気に入った作品があれば購入して家に飾る。そういうことがほんとうに日常の光景なのです。

多くのギャラリーでは扱っているアーティストや発掘したアーティストの展示会をつねに開催していて、特に現代アートでは世界の有力作家が美術館にもまさるコレクションを発表することも。しかもそれを入場無料で見ることができます。日本の村上隆氏を紹介したことで有名なマレ地区のギャラリー・エマニュエル・ペロタン、先ごろパリの8区に進出したNYのガゴシアン・ギャラリーなどは、まさに世界のアート界の最前線です。

特別な場所 パワースポット巡礼 1993-2010～本間日呂志写真展

期間：1月12日(水)～3月31日(木)
 時間：11時～18時(土・日・祝日は休業)
 場所：MGS
 (丸の内ギャラリー・アット・サカキラボ)
 住所：東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル地下1階
 主催：丸の内ギャラリー
 協力：サカキラボ
 お問い合わせ：サカキラボ 03-6269-9900

本間日呂志 フォトグラファー。あらゆるものの生命や息吹き、活きている瞬間を写真やムービーに表現し続け、ファッションやドキュメントなど、様々なジャンルの枠を超えて活動している。そしてその内面にある普遍的なものを常に新しい切り口で表現するアーティスト。http://www.h-homma.com/

Pickup MOVIE

「ディナーラッシュ」

text: Takeshi Okta

この映画コラムの打ち合わせで訪れた丸の内ザ・ラウンジ。そこから見える煉瓦造りや石造りの建物によって、まるで外国にきたような錯覚に陥りながら(＆おいしいカレーを食べながら)、1本の映画を思い出した。タイトルは「ディナーラッシュ」。冬のニューヨーク、トライベッカのジジーノ(実在のレストラン)の一夜を描いた2000年の作品だ。有名な俳優も出ていないし、監督もジジーノのオーナーという手作り低予算映画(一応、マイケル・ジャクソンの



「Beat It」のPVを撮った監督でもある)。しかし、ひとつの事件を軸に、従業員やお客が入り乱れ、やがて見事な収束を見せる群像劇だ。料理がすごくおいしそうなのも魅力。だから、食事中に思い出したのかも。

Pickup WINE

「ムータル・ブリュット・グランド・キュヴェ」

selection: Koichi Kunita (THE LOUNGE)

今回のおすすめワインは黒ブドウのピノ・ノワール100%でつくられたシャンパーニュ。3年以上の瓶熟成を経て、深みのあるまろやかな味わいに仕上がっている。シャンパーニュのみを味わうのはもちろん、魚介系と合わせてもよく、温度を上げれば肉にもぴったり。丸の内「ザ・ラウンジ」でお楽しみいただけます。グラス¥1,680(ハッピーアワーは¥1,050)。http://marunouchi.enoteca.co.jp/



Designer: Sidekick
 Editor: Yumiko Hanzawa (Sakaki Lab)
 Publisher: Ted Sakaki (Sakaki Lab)

発行元: サカキラボ
 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビルB116
 お問い合わせは info@sakakilab.netまで

